

ひと・ほう・もと　とど
人は法を求めるに止まつて、法(眞実)に生きることを忘れている

「『法語カレンドラー』・2014(平成26)年2月」

◎人間関係で悩んだ時、自力で解決しようとしたり・相手が謝れば良いのだと、人のセイにします。生まれてからズーッと、私の目で私の顔を直接見たことが無いように、自分の事は良く分かりません。生きている間、人間は欲望・願望が次々と生じ、自己(我)中心の考え方で世の中や他人を見ている限りは、何も解決しません。厳しく自己反省しないと、我流の偏った考えに陥り・苦悩します。

1 仏教は、苦惱を乗り越える道を説きます(特に『仏説観無量寿經』=観経)。

● 観経=マカダ国(マカダ)の王舍城に住む頻婆娑羅王が、我が王子・阿門世に牢獄に監禁、殺される。王子を唆したのは提婆達多(お釈迦様=釈尊の従兄弟)で、釈尊を妬み・沢山布施をする頻婆娑羅王を殺させ、マカダ国を奪い取らせ、自分は釈尊を殺し、仏教教団を奪おうとした。王子に「父王に子が無く、焦った王は古い師に見させた。『王舍城外の山で修行の仙人が3年後に死ぬと、王子が生まれる』と予言した。父王は家来に命じ、すぐ死ぬよう頼ませたが、仙人は拒否。父王は家来に殺させた。間もなく韋提希夫人が妊娠し、父王が占い師に聞くと『生まれる王子は、父王を殺すだろう』と予言。父王は『百尺(約30m)の高楼から産み落とせ』と命令したが、王子は小指を骨折しただけで助かった」と。この事実を提婆達多が王子に話し、王子に父王を殺害させた。

2 章提希夫人は、父王を殺さないよう王子に言つたがダメで、食物を王に運んだ母をも牢へ閉じ込めた。これを知った釈尊は、王宮へ行かれた。『釈尊、私は何の罪があつて悪い王子を生んだのか。また、提婆達多と従兄弟なのか』と大声を出し泣き崩れた。

★ 最高位の王女は、天国から地獄へ突き落とされ、その苦惱のどん底から釈尊に救い

を求めた。▼ 苦惱を除く方法=泣き叫ぶ王女をタダじょと暖かく見守られる釈尊!。

3 「私は間違つてはいない」の考え方を打ち破るのが『仏の智慧』です。信心とは、法(自然の法則=眞実)を知り・『如來は我なり』=我が身は仏、(されど)我是如來に非ず(曾我量深)』と田覗める智慧を頂くことです。如來=眞実の世界から来た(悟つた)人・仏。

4 約38億年前の地球(古代の海)に生まれた生物(ウイルス)から進化したのが、今の地球の全生物です。仏教は、『全ての生き物の命は、人間と同じく尊い』と説きます。5 毎日『法』に気づくことなく、食べ残しを捨てたり・自然破壊などの罪悪を重ねている私達です。『無益の殺生は、最大の罪惡である(釈尊)』。反省・懺悔し、「生かされている私」と歡喜し、報恩感謝する心が生まれた時に、新たな人生が始まるのです。